表現運動における「表現」の題材選定に関する試案

—児童と題材との関係を17年前の調査と比較して—

岡山市立西大寺小学校　安江　美保
筑波大学　村田　芳子

1　研究目的

自分を表現することが苦手な児童や，友達とかかわることが苦手な児童が増えてきている。その中で，小学校体育における表現運動領域においては，ますますその学習の必要性が高まり，心身を解放して「踊る」ことの意義が見直されてきている。しかし，その一方で，他の運動領域に比べて，何をどのように教えるのかが，まだまだ十分に明確にされていないため，実践へのハードルが高くなっている。学習内容を選定する明確な基準が求められているのである。

そこで本研究では，表現運動領域の「表現」において，児童と題材との関係に着目し，17年前に行った調査結果と比較しながら，その関係をより明確にとらえ，学習内容として評価の高い題材を明らかにしていくことで，学習内容を選定する試案をつくることを研究の目的とした。

2　研究方法

(1) 調査対象

岡山市内の小学校12校の児童，各学年男女 約100名ずつの合計200名をめやすに調査を実施した。全学年の合計人数は1336名である。

(2) 調査方法

調査方法は，質問紙法によるアンケート調査である。全て郵送して学級担任に実施してもらったが，可能な限り実施条件が同じになるように，実施説明書を同封し，説明の仕方を統一するようにした。

(3) 調査期間

２～５年生
…2006年６月～７月

１年生
…2006年９月～10月

(4) 調査内容

「表現運動に対する意識」「児童の好む題材とその理由」「イメージ発想と動きの予測」の３つの内容についての調査を行った。今回の研究では，「児童の好む題材とその理由」について分析を進めた。

3　結果と考察

題材30からやりたい題材を選択した結果，「全学年で高い」「低学年で高い」「高学年で高い」「全体で中程度」「全体で低い」の５つの題材群に分けることができた。前回と同じ題材群に入っていた題材は，30のうち14の題材であった。

次に，その題材を選択した理由を「題材の魅力」ととらえて分析をした結果，全学年を通して関心が高い題材からは「戦い・非現実・躍動的」，低学年で関心が高い題材からは「具象的・特徴的な動き」，高学年で関心が高い題材からは「動き・感情の起伏」というキーワードが抽出された。前回の結果と比べると，今回，全学年を通して関心が高い題材から抽出されたキーワードの中に「躍動的」というキーワードが新たに加わった。

さらに，「児童の題材への関心が高いこと，児童が動きでとらえやすいこと，動きの質感が多様であること」の３つの条件を兼ね備えた題材を『児童にとって学習内容として評価の高い題材』ととらえ，その条件を満たす題材を９つにしぼった。そして，縦軸に「動きの質感の広がり」，横軸に「とらえ方の発展」として配列した結果，図１のような試案をつくることができた。

図１を縦に見ていくと，低学年，中学年，高学年ごとに，下から順に「動きから入りやすい題材」「戦いを中心とした題材」「多様なとらえ方のできる題材」と並んでいて，クラスの児童の実態に応じて題材を選ぶことができる。今回の調査では，教師側から見た教えたい内容との関係から題材を位置づけることはできていない。今後に残された課題である。

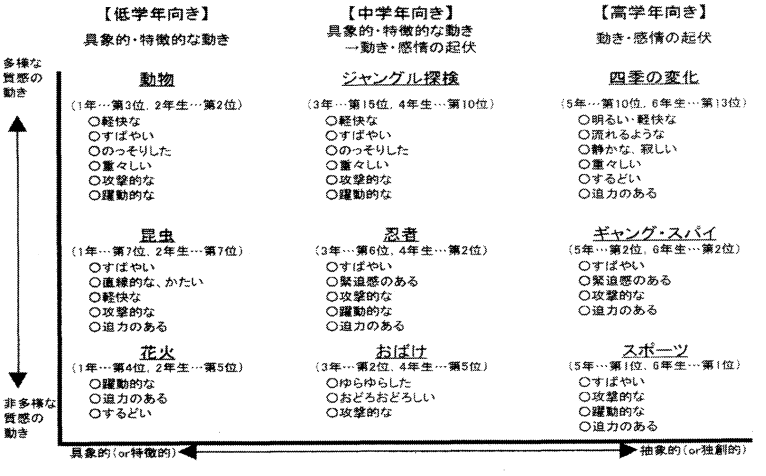

図１　児童にとって評価の高かった９つの題材・配列案